田沼　そうですね。医療の提供だけなく、その先にある、地域の中で安心して暮らしていくというゴールに向かって、患者さん一人ひとりのニーズに応えていくということですね。先ほどの生島さんのコミュニティ形成のお話にも通じるところがありますね。

コミュニティの中から
コミュニティに向けて取り組む

田沼　岩橋さんは、コミュニティの役割についてどのようにお考えでしょうか。

岩橋　コミュニティには色々な意味が含まれますので説明が難しいのですが、私たちが情報発信や啓発活動を行う上で重視していることをいくつかお話ししたいと思います。

　一つは、私たちがスローガンにも掲げている「コミュニティの中からコミュニティに向けて」ということです。HIV や性感染症などの情報は普段から向き合いたいような情報ではありません。設立当初は新宿 2 丁目でアウトリーチ活動を行うと、「日頃からセクシャルマイノリティであることをオープンにできない中でここに来て楽しんでいるのに、なぜ検査の話をするのか」「うちの店には HIV 陽性者は来ないから関係ない」といった声もあり、活動自体が難しい状況でした。それでもスタッフが同じユニフォームを着て定期的にアウトリーチ活動を行っていると、「毎週見かけるあの人たちは何をしているの？」と徐々に話題にされるようになったり、新しくオープンしたお店の方から「どうすれば来てくれるのか」と問い合わせを受けたりするようになりました。

　専門機関や行政が情報を発信するだけでは、コミュニティで実際にどう受け止められているかというフィードバックを得にくいと思いますが、私たちはコミュニティを周りながら、正しい情報が届いているのか、情報資材やメッセージが効果的であるか、今どのような情報が求められているかなどを直接把握できます。そこから情報発信のあり方を見直し、改善することもできます。その意味で、コミュニティの中からコミュニティに向けて情報発信を行うことがとても重要だと思っています。

田沼　akta は参加している当事者の方が色々な企画や情報資材の制作にも関わっていて、HIV や性感染症に関心を持ってもらうきっかけづくりがとても上手ですよね。

岩橋　はい。多くの人に健康情報が届くように、イラスト展や特設カフェなど、誰でも気軽に来られる場を皆で考えながら提供しています。

市民団体が連携し、
コミュニティの声を届ける「GAP 6」

岩橋　もう一つ重視していることは、コミュニティの視点から医療者や行政に向けたアドボカシーにチャレンジすることです。2021 年の世界エイズデーに発足した HIV / エイズ啓発活動コンソーシアム「HIV/AIDS GAP 6（以下、GAP 6）」として活動しています。GAP 6 は、はばたき福祉事業団、ぷれいす東京、akta、ジャンププラス、ZEL、魅惑的倶楽部の 6 つの団体と協力企業であるギリアド・サイエンシズ社が参画し、コミュニティの視点から、HIV/ エイズの誤解・偏見の解消と、適切な予防・検査・治療の推進を目指しています。2023 年 8 月 31 日には、「日本における HIV/ エイズの流行終結に向けた要望書」を厚生労働大臣に提出しました。

田沼　GAP 6 のように薬害エイズの被害者の支援団体と性感染症の患者さんの支援団体が協働することは、それぞれの視点が合わさって視野が広がりますね。とても有意義だと思いますが、武田さん、いかがでしょうか。

武田　そうですね。私たちが GAP 6 に参画した理由として、2030 年までにエイズ流行を終結させるという大きな目標を皆で共有できることが挙げられます。それぞれの団体にはそれぞれの目標がありますが、このシンプルで大きな共通目標に向かって皆でやっていこうという動きはとても意義のあることだと思っています。

　私たちが HIV/ エイズの流行終結の実現に向けて取り組む背景には、HIV の医療体制を患者さんたちが自ら思い描いてつくってきたという歴史があります。かつての HIV 陽性者は、診てもらえる医療機関を見つけるのも困難なほど偏見差別を受けていました。自分たちの力でなんとか医療を提供してくれる人を探す中で、東京大学医科学研究所の島田馨先生に出会い、HIV/ エイズの治療を引き受けていただき、当時最先端だった「発症予防」という考え方に基づく医療体制がつくられていきました。そして薬害エイズ裁判の和解を踏まえて ACC が立ち上げられ、全国のブロック拠点病院のネットワークもできました。今よりもずっと重症者や死亡者も多かった頃から、国に働きかけて自分たちの命を守るための医療体制をつくってきたからこそ、患者さんたちには流行終結まで覚悟を持って取り組んでいこうという想いがあります。その想いから GAP 6 への参画に至ったと思います。

（左から）岩橋理事長（akta）、武田理事長（はばたき福祉事業団）、生島代表（ぷれいす東京）、田沼医師（ACC）

田沼　これまでの歩みを思い返すと、改めて素晴らしい取り組みだと感じます。生島さんはいかがですか。

生島　以前からいくつかの参画団体とは、日本エイズ学会への当事者参加を促進する「スカラシッププログラム」や、HIV 陽性者の就労支援など、ケアの領域で協働してきたのですが、GAP 6 では予防の領域についても一緒に考える機会になっています。国への提言内容をディスカッションしながらまとめていくプロセスはとても有意義でしたし、自分たちの考える理想を直球で投げかけることの大切さを認識しました。GAP 6 に参画して、私たち自身も変わることができた部分があるように思います。

田沼　今後、PrEP（曝露前予防内服）が普及していくと、予防のために医療とつながる人も増えますので、コミュニティの視点での取り組みはますます必要になってきますね。個人的には 2019 年にロンドンで National AIDS Trust（英国の HIV 関連の権利擁護団体）による政策提言を見たのですが、市民と専門家が一緒になって提言をつくり上げていたことが印象に残っています。あのように専門家側も十分に議論をして、市民と一緒に実現に向かわせることができるといいと思います。岩橋さんはいかがですか。

岩橋　ロンドンの例もそうですが、オーストラリアのニューサウスウェールズ州での政策の立てられ方も同じですね。NGO などの団体、コミュニティから意見を集約し、政策の青写真となるレベルの提言を政府に出し、政府がそれを採用するかを検討します。団体やコミュニティが HIV の治療やケアの領域でどういう制度が必要かを提案し、実際に社会に実装されています。日本ではまだそこまでの状況に至っていませんが、GAP 6 は 2030 年までのエイズ流行終結に向けて何が必要かを提言するための意味のある第一歩となったのではないかと思います。

これからのコミュニティが
必要とするもの、ACC に求めること

田沼　GAP 6 が国に提出した要望書にも「性感染症に関する特定感染症予防指針」「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」の改正が含まれていましたが、コミュニティで実際に求められる予防とケアのあり方を考えていく必要がありますね。

生島　そうですね。HIV 感染の問題はどうしても都会での話題に終始しがちですが、地方都市に暮らしている人をどうカバーしていくかが今後の課題だと思っています。報告書を見ると、エイズを発症して初めて感染に気がつく人は地方都市の方が多いので、地方の HIV 陽性者をどう支援していくかが重要です。私たちのオンラインでのミーティングには地方の人も参加できますが、だからといって私たちがすべてを担うのではなく、地方を拠点に地道に活動する団体と手を組んで何ができるかを考えていきたいと思っています。エイズ流行終結は、地方都市抜きでは達成できないと思いますし、NGO だけでも不可能ですし、誰も取り残さないために何が足りないかを皆で考えていく必要があると思います。

田沼　その通りですね。実は私も地方でどう取り組むかは今後の課題だと感じているところです。エイズ流行の終結後に予算も患者さんの発生も少ない中で、それでも残っているやるべきことにどう取り組むか、地方でどういうモデルをつくるのかは重要な指摘だと思います。最後に、お一人ずつこれからの ACC に期待することをお聞かせください。

生島　ACC は全診療科で対応できるという貴重な医療機関だと思いますので、この治療環境を今後も続けていただきたいですね。外国人の患者さん対応や、地域との連携についてもより充実していただけると嬉しく思います。

武田　ACC には、その成り立ちを次の世代にもきちんと引き継いでいってほしいと思います。患者自身が思い描いた医療体制をつくるために原告団が求めたのは、HIV 感染者全体の救済でした。ACC にはこれからも救済医療の砦であってほしいと思いますし、患者参加型の医療を長く続けてほしいと願っています。

岩橋　今は HIV の治療と予防の技術が非常に進歩したことにより、治療・予防を両輪で取り組むようになってきています。ACC も治療だけでなく、SH 外来の取り組みなど、患者さんではない人たちに対する定期的な検査支援も行っていると思います。治療と予防を両輪で進めていく上で重要なことは、地域でエイズ対策に取り組む人と臨床現場の医療者が地域で何が必要なのかという情報をしっかり共有していくことだと思います。ACC には 2030 年のエイズ流行終結を実現するキープレーヤーとして情報を共有できる体制づくりも推進していただけることを期待しています。

　最後に、来年の学会のテーマについて少し触れさせてください。テーマはまだ確定ではありませんが、HIV に関わるすべての人のエンパワーメントと、感染症によって引き起こされる人々の分断を終結させるという 2 つのメッセージを考えています。

　エイズ流行終結は共通目標ですが、それを達成した後も HIV 陽性者たちの生活は続きます。解決すべき根本的な問題は、たかが感染症で人々が分断されてしまうことだと思います。それはコロナの流行においても私たちが経験したことであり、他の感染症でも起こり得ることです。この問題に対して、私たちがエイズ対策の活動から学んできたことを活かしながら終結につなげていきたいと考えています。学会は新宿で開催しますので、ぜひ皆さんにもまた参加していただきたいと思います。

田沼　本日は色々なお話をお聞かせいただきました。コミュニティや患者さんとの協働のあり方を今後も考えながら、ACC が取り組むべきこと、目指すべきゴールを引き続き追求していきたいと思います。ありがとうございました。